

東邦大学学術リポジトリ

Toho University Academic Repository

タイトル	現任看護師を対象とした実習プログラムにおける実習指導者の役割に関する検討
別タイトル	A study on the role of practice instructors in a practice program for incumbent nurses
作成者（著者）	宮城, 真樹 / 御任, 充和子 / 林, 弥生 / 山本, 由香 / 横井, 郁子
公開者	東邦看護学会
発行日	2021.03.01
ISSN	21855757
掲載情報	東邦看護学会誌. 18(2). p.31 38.
資料種別	学術雑誌論文
内容記述	実践報告
著者版フラグ	publisher
JaLCDOI	info:doi/10.14994/tohokango.18.2.31
メタデータのURL	https://mylibrary.toho-u.ac.jp/webopac/TD35407334

【実践報告】

現任看護師を対象とした実習プログラムにおける 実習指導者の役割に関する検討

A study on the role of practice instructors in a practice program for incumbent nurses

宮城 真樹¹⁾, 御任 充和子²⁾, 林 弥生³⁾, 山本 由香⁴⁾, 横井 郁子^{1) 2)}

Maki MIYAGI¹⁾, Miwako MITO²⁾, Yayoi HAYASHI³⁾, Yuka YAMAMOTO⁴⁾, Yuko YOKOI^{1) 2)}

要 旨

【目的】 現任看護師を対象とした実習プログラムにおいて実習指導者が感じていた指導上の困難や工夫から、実習指導者の役割について検討することを目的とする。

【方法】 調査協力の得られた実習指導者10名からのインタビュー調査のデータを用いて質的記述的分析を行った。

【結果】 指導上の困難は、【受講生の目的・目標・ニーズの把握】【受講生の学びの共有】【現任看護師である受講生への関わり方】【短期間実習の受け入れ体制の整備】の4カテゴリー、指導上の工夫は、【体験をしてもらうことは意図的に設定】【受講生との対話方法】の2カテゴリーが生成された。

【考察】 現任看護師対象の実習プログラムにおける実習指導者は、受講生が現任看護師ゆえに関わり方に戸惑う存在と捉え指導上の困難を感じていた。しかし受講生と行動を共にする中で、意図的に体験の機会を提供し対話方法の工夫が生まれていた。共同探求者として受講生との対話や体験から、受講生自らの気づきを促すプロセスを支援することが実習指導者の役割であると示唆された。

キーワード：現任看護師 実習指導 インタビュー調査

I. 緒言

近年の医療の高度化、少子高齢社会化を背景に、地域包括ケアシステムの構築に向け、医療と介護のさらなる連携推進が求められている¹⁾。そのためには、病院から暮らしの場へ医療・看護をつなぐ教育を充実させること、および看護師の専門性を強化していくことが必要である²⁾。今後、看護の実践場所が広がり、よ

り専門性を強化していく教育を充実させていくためには、常に変化する実践現場での体験的学習を行うことが有効であると考えられている³⁾。そこで、ケアを引き継ぐ次の連携先を知識として理解するだけでなく、そこでのケアを共有することは看護実践者の学習として重要ではないかという仮説の下、現任看護師を対象とした臨地実習形式の教育プログラムを計画、実施した。

¹⁾ 東邦大学看護学部 ²⁾ 東邦大学地域連携教育支援センター

³⁾ 東邦大学医療センター佐倉病院 ⁴⁾ 東邦大学医療センター大森病院

¹⁾ Faculty of Nursing, Toho University ²⁾ Community-Based Learning Support Center, Toho University

³⁾ Toho University Sakura Medical Center ⁴⁾ Toho University Omori Medical Center

初学者である看護学生に対する臨地実習指導で実習指導者は、看護学生にとってのロールモデルとなり、看護実践の意味づけ、根拠の解説、看護学生の実践へのアドバイスを行うなど教育的関わりが主な役割となっている⁴⁾。そして、実習指導者としての役割や効果的指導の視点を研修会・講習会に参加することで構築していることが明らかとなっている⁵⁾。ところが、現任看護師に対する臨地実習指導者としての役割や指導の視点を明らかにしたものは見当たらない。臨地実習プログラムがある専門看護師、認定看護師など高度実践看護師養成プログラムにおいても教育内容に対する要望として、実習内容・実習指導の充実が最も多く挙げられているという報告がある⁶⁾。また、専門職者の実践的な能力を高める教育方法として実習や実践が挙げられるが、その重要性のみを謳った盲目的な教育になっており、どのような経験が専門性を高める上で意味があるのかという検討を欠いたものになっているという指摘もある³⁾。つまり、現任看護師がさらなる実践を学ぶための看護継続教育としての実習においては、その内容や指導は十分検討されていないことが推察される。本プログラムにおいても受講生からは好評を得た一方、実習指導者が受講生の対応に苦慮する様子がうかがえた。現任看護師を対象とした臨地実習形式のプログラムにおいて、受講生にどのような体験を提供するのかといった実習指導者の役割を明確にすることは、現任看護師を対象とした看護継続教育プログラムの質の保障に寄与すると考えた。

II. 包括ケア実感プログラムの概要

文部科学省の「課題解決型高度医療人材養成プログラム」事業に採択されたことを受け、卒前卒後を通しての地域包括ケア推進のための7種類の教育プログラムを開発、実践した(通称: いえラボプロジェクト/以下、いえラボプロジェクト)。包括ケア実感プログラム⁷⁾は、いえラボプロジェクトが実施する7つの教育プログラムの一つであり、急性期病院から患者を送り出す次の療養場所(回復期リハビリテーション病院、介護老人福祉施設、患者宅を設定)に赴き、それぞれの場で実践されているケアを実感し、ケアの連続

性の重要性を再認識することを目的としている。2015年度～2017年度まで実施され、計37名が受講修了している。受講生の受講時平均年齢は 37.5 ± 7.2 歳、受講生の受講時平均勤務年数は 15.6 ± 7.1 年であった。

プログラムの実習は、受講生が主体的に実習施設スタッフと共にケアに参加し、そのケア内容を観察するという参与観察形式とした。受講生は、基本的に施設内を自由に移動しながら、もしくは実習指導者と同行し、状況に応じてケアに参加し、カンファレンスにも同席した。また、それぞれの場所での実習終了時に、施設側の実習調整担当者(直接実習指導を担当した者ではなく、施設側の実習受け入れ調整役割を担う者)と振り返りを行った。実習期間は、回復期リハビリテーション病院2日間(8:30～16:00)、介護老人福祉施設2日間(15:00～翌10:00)、訪問看護ステーション3日間(8:30～16:00)の合計7日間である。それぞれの場所でのケアの特徴を体感することを実習目標に掲げ、事前学習として実習場所の設置基準を含む施設概要、法的根拠、対象者、診療報酬などを各自でまとめた。実習後には「急性期病院から次の療養場所へつなぐ看護を考える」というテーマでプレゼンテーションと討議を行った。

III. 目的

包括ケア実感プログラムの実習において、受講生と共にケアを実施しケア場面を観察させるなど直接指導にあたった者が、受講生が現任看護師ゆえにどのような困難を感じていたのか、また、どのような工夫をしたのかをインタビュー調査により明らかにし、現任看護師を対象とした臨地実習における実習指導者役割について検討することを目的とする。

なお、本論文における現任看護師とは、包括ケア実感プログラム受講対象者である「急性期病院に勤務している看護師」と定義する。また、基本的に各受講生専任の実習指導者はいなかったが、本論文における実習指導者とは、包括ケア実感プログラムの実習施設において「受講生と共にケアを実施し、ケア場面を観察させるなど直接指導を行った者」と定義する。

IV. 方法

1. 研究デザイン

半構造化インタビュー調査による質的記述的研究

2. データ収集期間

2018年1月～3月

3. 研究対象者

包括ケア実感プログラムにおいてインタビュー調査に参加の意思を表明し、同意書に署名した実習指導者10名を対象とした。

4. データ収集方法

1) リクルート方法

本プログラムの実習施設の施設長に対し、本研究の調査協力に関する依頼文書を送付し調査の同意を得たのち、本プログラムの実習指導者に対し、インタビュー調査協力依頼文書の配布を上司からの強制力が働かないような方法で実施してもらうよう依頼した。インタビュー調査は、調査協力者の可能な日程ならびに場所を調整することを依頼文書に記載した。

2) 調査方法

実習指導者から調査協力の意思が示された時点で、実施可能なインタビューの日程ならびに場所を調整し、30分程度のインタビューをインタビューガイドに沿って実施した。実施にあたっては、調査に関する説明文書を用いて説明し、同意書への署名を得た上で実施した。調査場所は静かな個室とし、参加者の承諾を得てICレコーダーを設置し録音した。

5. 調査内容

1) 対象者の背景

- (1) 個人的背景－年齢、性別、専門学歴、職種
- (2) 職種としての経験－通算の臨床経験年数、職位
- (3) 実習指導者としての経験－学生指導経験の有無、実習評価実施経験の有無、通算の実習指導経験年数、実習指導者研修受講の受講状況と主催機関

2) 受講生が現任看護師ゆえに感じた指導上の困難

3) 受講生が現任看護師ゆえに実施した指導上の工夫

6. データ分析方法

録音したデータの逐語録を作成し、受講生が現任看護師ゆえに感じた指導上の困難や工夫に関する文章を抽出しコード化した。類似するコードをまとめ、サブカテゴリーを抽出し、さらにサブカテゴリーの類似性に基づいてカテゴリーとした。分析においては、共同研究者で妥当性を検討し確認しながら実施した。

7. 倫理的配慮

本研究の実施にあたっては、東邦大学看護学部倫理審査委員会の承認を得て行った（承認番号：29011）。本プログラムの実習指導者に研究目的、方法など倫理的配慮について文書を用いて説明し、同意書へ署名を得た上で実施した。インタビューデータはすべて電子化し、ファイルにはパスワードをかけ管理を行った。

V. 結果

1. 対象者の概要

本研究に同意を得られた10名の概要を示す（表1）。対象者の年齢は、40歳代が最も多かった。通算の臨床経験年数は6～20年（平均 16.0 ± 4.3 年）、実習指導経験年数は3～19年（平均 7.4 ± 4.9 年）であった。現在の勤務先の種別は、訪問看護ステーションが5名、リハビリテーション病院が4名、介護老人福祉施設が1名、職位は、スタッフが5名、サブマネージャー（主任）が5名と半々であった。学生に対する実習指導経験はすべての対象者にあり、そのうち6名は実習評価にも携わった経験があった。なお、実習指導者講習会の受講経験がある者は3名のみ（都道府県看護協会開催のもの2名、病院内講習会1名）であった。インタビューに要した時間は、15～40分（平均 21.9 ± 6.9 分）であった。

2. 受講生が現任看護師ゆえに感じた指導上の困難

受講生が現任看護師ゆえに感じた指導上の困難は81コードが得られ、さらに抽象度を上げ、7サブカテゴリー、4カテゴリーを生成した（表2）。生成された

表1. 対象者の概要

対象者	年代 (歳)	性別	勤務先の種別	通算の 臨床経験 (年)	専門 学歴	学生実習 指導経験 の有無	通算の実習 指導経験 (年)	実習指導者 研修受講 経験の有無	実習評価 実施経験の 有無	面接 時間 (分)
A	40	女性	訪問看護 ステーション	14	大学院	あり	4	あり	あり	40
B	40	女性	訪問看護 ステーション	20	専門学校	あり	12	あり	なし	22
C	60	女性	訪問看護 ステーション	15	専門学校	あり	19	なし	あり	20
D	40	女性	訪問看護 ステーション	18	専門学校	あり	8	なし	なし	23
E	40	女性	訪問看護 ステーション	20	専門学校	あり	7	なし	なし	22
F	30	女性	リハビリ病院	17	専門学校	あり	6	なし	あり	18
G	40	女性	リハビリ病院	20	専門学校	あり	7	なし	あり	21
H	30	女性	リハビリ病院	6	短期大学	あり	3	なし	あり	16
I	40	男性	リハビリ病院	13	専門学校	あり	4	なし	あり	15
J	30	女性	介護老人 福祉施設	17	専門学校	あり	4	あり	なし	22

カテゴリーは、【受講生の目的・目標・ニーズの把握】
【受講生の学びの共有】【現任看護師である受講生への
関わり方】【短期間実習の受け入れ体制の整備】であっ
た。以下、文章中の【】はカテゴリー、〔〕はサブ
カテゴリー、<>はコードを示す。

1) 【受講生の目的・目標・ニーズの把握】

<受講生が実習したい内容を伝えても実習指導者側
に対応する自覚がなかった><本人の見たいこと、学
びたいことが実習指導者にうまく通じていない>と
〔受講生の実習目標・内容を把握するという認識の不
足〕があったと感じていた。また、<受講生の求めている
ものを見せてあげられているのかわからなかった><知
りたいことが知れているのか疑問、心配はあった>
と〔受講生のニーズに応えられていたか心配〕してい
た。このように【受講生の目的・目標・ニーズの把握】
に困難を感じていた。

2) 【受講生の学びの共有】

<現任看護師の実習だと今回の実習がうまくいった
のかどうか手応えを感じにくい><実習の目標が達成
できているのか把握しづらい><本当にこれでよかつ
たのかという思いがあり実習指導者に不安全感が残る>

など、〔学びの共有ができず手応えを感じにくい〕こ
とから【受講生の学びの共有】が困難と感じていた。

3) 【現任看護師である受講生への関わり方】

<現任看護師に対しては、わかっているであろうと
思うため目標や計画の確認はしづらい><病院での看
護経験がある看護師への指導的な関わりや発言はしに
くい><実習指導者より受講生のほうが年上で経験年
数も多いと対応しづらい>など、〔受講生の知識や経
験に対する気後れ〕があった。また、<受講生との関
わりをどのようにしたらいいのか困った><知識や経
験の差によって説明の要否判断が困難である>など、
〔受講生が現任看護師であることへの戸惑い〕があり、
【現任看護師である受講生への関わり方】に困難を感
じていた。

4) 【短期間実習の受け入れ体制の整備】

<実習期間が短いのでざっくりと全体を見てもら
うことに主眼を置かないとやっていけない><現任看護
師の実習では時間がなくて話は聞けない>と〔短
期間での実習体制〕であったことに加えて、<実習調
整担当者が不在のときの対応が困難であった><実習
指導者が複数になると現場での調整が困難であり、そ

表2. 受講生が現任看護師ゆえに感じた指導上の困難

カテゴリー	サブカテゴリー	代表的なコード
受講生の目的・目標・ニーズの把握	受講生の実習目標・内容を把握するという認識の不足	本人の見たいこと、学びたいことが実習指導者にうまく通じていない
		受講生が実習したい内容を伝えても実習指導者側に対応する自覚がなかった
	受講生のニーズに応えられていたか心配	受講生の求めているものを見せてあげられているのかわからなかった
		知りたいことが知れているのか疑問、心配はあった
受講生の学びの共有	学びの共有ができず手応えを感じにくい	現任看護師の実習だと今回の実習がうまくいったのかどうか手応えを感じにくい
		実習の目標が達成できているのか把握しづらい
		本当にこれでよかったのかという思いがあり実習指導者に不全感が残る
現任看護師である受講生への関わり方	受講生の知識や経験に対する気後れ	病院での看護経験がある看護師への指導的な関わりや発言はしにくい
		現任看護師に対しては、わかっているであろうと思うため目標や計画の確認はしづらい
		実習指導者より受講生のほうが年上で経験年数も多いと対応しづらい
	受講生が現任看護師であることへの戸惑い	受講生との関わりをどのようにしたらいいのか困った
知識や経験の差によって説明の要否判断が困難である		
短期間実習の受け入れ体制の整備	短期間での実習体制	現任看護師の実習では時間がないので話は聞けない
		実習期間が短い(1日とか2日)なのでざっくりと全体を見てもらうことに主眼を置かないとやっていけない
	実習指導者による統一した対応が困難	実習調整担当者が不在のときの対応が困難であった
		実習指導者が複数になると現場での調整が困難であり、その改善も難しい

表3. 受講生が現任看護師ゆえに実施した指導上の工夫

カテゴリー	サブカテゴリー	代表的なコード
体験してもらうことは意図的に設定	目的に合った訪問先の選定の実施	患者選定のマッチングはすごく工夫している
		訪問先で実習が決まるので訪問先の選定は重要
	ありのままの現場を見てもらう	いつもやっていることをそのまま見ていただく
		指導せねばという意識を強く持たず実際の現場を見てもらうという気持ち
受講生は技術的なことはわかっているの現場を見てもらっている		
受講生との対話方法	伝えるタイミング	その場で説明できることは説明し、できないときは終了後に説明している
	自身の思いを伝達	思いがあつての説明になっていると思う
		自分の思いを伝えている

の改善も難しい>など〔実習指導者による統一した対応が困難〕になると【短期間実習の受け入れ体制の整備】に困難を感じていた。

3. 受講生が現任看護師ゆえに実施した指導上の工夫

受講生が現任看護師ゆえに実施した指導上の工夫は37コードが得られ、4サブカテゴリー、2カテゴリー

を生成した(表3)。生成されたカテゴリーは、【体験してもらうことは意図的に設定】【受講生との対話方法】であった。

1) 【体験してもらうことは意図的に設定】

<患者選定のマッチングはすごく工夫している><訪問先で実習が決まるので訪問先の選定は重要>と考え〔目的に合った訪問先の選定の実施〕を行っていた。

さらに、<いつもやっていることをそのまま見ていただく><指導せねばという意識を強く持たず実際の現場を見てもらうという気持ち><受講生は技術的なことはわかっているので現場を見てもらっている>というように〔ありのままの現場を見てもらう〕ことを意識的に行うなど、【体験してもらうことは意図的に設定】していた。

2) 【受講生との対話方法】

<その場で説明できることは説明し、できないときは終了後に説明している>と〔伝えるタイミング〕の工夫や、<自分の思いを伝えている><思いがあつての説明になっていると思う>と〔自身の思いを伝達〕するなど【受講生との対話方法】の工夫をしていた。

VI. 考察

1. 実習指導者が感じる指導上の困難について

今回のインタビュー結果から、実習指導者は、【受講生の目的・目標・ニーズの把握】【受講生の学びの共有】【現任看護師である受講生への関わり方】【短期間実習の受け入れ体制の整備】に対して困難を感じていた。

【現任看護師である受講生への関わり方】に困難を感じていた背景には、〔受講生の知識や経験に対する気後れ〕や〔受講生が現任看護師であることへの戸惑い〕から、受講生を積極的に働きかけなくてもよい存在、関わり方に戸惑う存在として捉えていたと考える。受講者は5年から34年の勤務経験を有する者たちであり、平均勤務経験年数は実習指導者とほとんど変わらなかった。経験知を持ち自身の課題を持って臨んでいることは、看護基礎教育課程の学生との大きな違いである。半田⁸⁾は、専門看護師コースの実習生を受け入れる中で、スタッフから「何を教えてあげたらよいのか」と、看護基礎教育課程の実習生への関わりとの違いに戸惑っていることもあったと述べている。今回の実習指導者も同様のことが生じていたように推測する。関わり方への戸惑いは、関係性を構築しコミュニケーションが円滑に行えれば解決できると思われるが、【短期間実習の受け入れ体制の整備】の困難さも相まって受講生との関係性を築く時間を持つこ

とができなかった。それが【現任看護師である受講生への関わり方】への困難感につながり、さらには【受講生の目的・目標・ニーズの把握】【受講生の学びの共有】が困難になっていたと考えられる。

一般的に看護師としての技術習得などは教授者主導の学習によって習得すべき部分も多いため⁹⁾、初学者である看護学生に対する実習指導者の役割は助言指導を通して学びを提供することであると認知されている。実習指導者講習会においても教育学を基盤に実習指導者としての役割や効果的指導の視点を修得できるようになっている⁵⁾。本プログラムの実習は研究者らが教育機関所属であることを活かし、看護基礎教育課程の実習生を受け入れている施設に受け入れを依頼した。その際、受講生が現任看護師であるという特性から、受講生の積極的かつ主体的活動を前提としていたために、実習受け入れ施設側に対してプログラム概要と受講生の特性を伝えたのみで詳細な指導内容の依頼はしていなかった。そして、熟慮せず実習指導者という言葉を使用した。この実習指導者という表現が、実習指導者に看護学生に対する実習指導を想起させ、受講生に対し助言指導せねばという思いを生じさせ【現任看護師である受講生への関わり方】の困難感につながった可能性がある。

加えて、実習指導者に詳細な指導内容の依頼をしていなかったゆえに〔受講生の実習目標・内容を把握するという認識の不足〕が起こり、〔受講生のニーズに応えられていたか心配〕と受講生対応に自信が持てず、〔学びの共有ができず手応えを感じにくい〕ことにつながり、【受講者の目的・目標・ニーズの把握】【受講生の学びの共有】が困難になっていたと推測する。今後は、受講生の特性を踏まえ、実習指導者という表現は使用せず、相互に高め合う仲間として、現場でのケアを受講生と共有できる体験を提供してもらうよう具体的に依頼していく必要がある。

2. 実習指導者が実施した指導上の工夫について

一方で実習指導者は、〔目的に合った訪問先の選定の実施〕や〔ありのままの現場を見てもらう〕など【体験してもらうことを意図的に設定】し、〔自身の思いを伝達〕するなど【受講生との対話方法】を工夫して

いた。

これらの工夫は、実習指導者が臨床経験を持つ看護師同士という立場で自身の思いを受講生に伝えながら、ケアについて話し合い、実践するという体験を通して、指導せねばという意識を強く持たず実際の現場をそのまま見てもらうという気持ちを抱いたことから生まれたと考える。

ノールズは成人学習者の特徴の中で「蓄積してきた経験が豊かな学習資源になる」と述べている¹⁰⁾。そして、成人教育者はこの成人学習者の特徴を踏まえ、共同探求者としての相互に高め合うような存在になることが望ましいと考えられている¹¹⁾。今回、実習指導者が受講生と行動を共にする中で行った工夫は、対話を通して互いの蓄積してきた体験に触れ、その中から多くの気づきを得るという成人学習者の特徴を踏まえた学びのプロセスを支援していたと考える。また、成人教育者として成人学習者である受講生の共同探求者としての役割を担っていたと推察できる。今後、実習依頼時には、このような成人学習者の特徴を踏まえた学び方について具体的に説明することで、相互に学び合い高め合う共同探求者として、受講生と共に体験を共有し対話を通して受講生自らの気づきを促すという学習プロセスを意図的に支援できると考える。

VII. 本研究の限界と今後の課題

本研究の対象者は、「包括ケア実感プログラム」において受講生と共にケアを実施しケア場面を観察させるなど直接指導にあたった者だったが、介護老人福祉施設からは1名しか協力が得られず、各々の実習場所の特徴や実習指導者が感じた困難や受け入れの際の工夫が十分に反映できなかった。また、実習内容の事前理解については調査していないため、どのような理解の下で感じたことであったのかの言及に至っていないことが本研究の限界である。

VIII. 結語

現任看護師を対象とした臨地実習が主体の学習形式である「包括ケア実感プログラム」において、実習指

導者は【受講生の目的・目標・ニーズの把握】【受講生の学びの共有】【現任看護師である受講生への関わり方】【短期間実習の受け入れ体制の整備】に困難を感じていた。そして、そのような困難を感じつつも、臨床経験を持つ看護師同士という立場で、受講生とケアについて話し合い、実践するという体験を通して【体験してもらうことは意図的に設定】し、【受講生との対話方法】の工夫をしていた。このことから、現任看護師に対する実習指導者の役割は、実習指導者という表現が示す「指導する者」という考えにとらわれず、共同探求者として受講生と共に体験を共有し、対話を通して受講生自らの気づきを促すという、成人学習者の特徴を踏まえた学習のプロセスを支援することであると示唆された。

謝辞

本研究にご協力いただきました実習指導者の皆様、調査施設スタッフの皆様、ご指導くださいました先生方に心よりお礼申し上げます。

なお、本研究は、2019年8月に開催された第50回日本看護学会-看護教育-学術集会にて発表した。

本研究における利益相反は存在しない。

引用文献

- 厚生労働省：地域包括ケアシステム。
(https://www.mhlw.go.jp/stf/seisakunitsuite/bunya/hukushi_kaigo/kaigo_koureisha/chiiki-houkatsu/, 2020.1.17)
- 成木弘子：地域包括ケアシステムの構築における“連携”の課題と“統合”促進の方策。保健医療科学, 65 (1) : 47-55, 2016.
- 高橋満：看護の力をどのように育むのかー労働の場における学びの方法と構造ー。東北大学大学院教育学研究科研究年報, 60 (1) : 143-168, 2011.
- 渡部菜穂子, 一戸とも子：看護学実習における臨地実習指導者の「看護実践の役割モデル」の認識。弘前学院大学看護紀要, 6 : 1-10, 2011.
- 二十軒温美, 看護学先行研究からみた臨地実習指導者の現状と課題。園田学園女子大学論文集, 51 : 53-60, 2017.
- 白井いづみ, 中村伸枝, 松田直正 他：専門看護師・専門看護師教育課程修了者および看護管理者の専門看護師教育課程へのニーズ。千葉看護学会誌, 17 (1) : 35-42, 2011.
- 地域連携教育支援センター：TOHO いえラボ 2017年度活動内容 包括ケア実感プログラム。

(https://www.toho-u.ac.jp/nurs/ielab2014/project/action2017_3.html, 2020.3.18)

- 8) 半田浩美：【小児看護における教育的アプローチ 院内・学内での工夫とポイント】看護師の現任教育を再考する 小児看護専門看護師コースの実習生を受け入れる際の工夫 指導体制づくりの工夫. 小児看護, 36 (2) :180-186, 2013.
- 9) 伊原千晶：成人教育の観点から見た対人援助職教育－医師，薬剤師，そして公認心理師－. 人間文化研究, 38 : 17-35, 2017.
- 10) Malcom S Knowles：堀薫夫，三輪建二（監訳）：成人教育の現代的実践 ペタゴジーからアンドラゴジーへ. 40, 鳳書房，東京，2002.
- 11) 島美佐子：M. ノールズの成人教育理論に関する考察－理想的な成人教育者像に焦点をあてて－. 早稲田大学大学院教育学研究科紀要, 26 (2) : 45-54, 2019.